



月のヒカリ

IV

著：モカ

絵：Nanaha



Konoha Hikari
木ノ葉 ヒカリ

高校2年生になったばかりで、性格は真面目で明るい性格、弓道が得意。

2年前父親が再婚し家族が増え今は両親と兄との4人暮らしだがヒカリは家族に馴染めずいつも孤独を感じている。

学校の弓道場で矢を放ったさいに不思議な光に導かれ異世界セブズドアに迷い込む。



Geluka
月下

髪の色は黒で少し幼さが残る顔に緋色の瞳がとても印象的な龍神人の青年。

闇を抑える不思議な力を持っている。

ヒカリの前では冷たく接しているがいつも気に掛けている。



Zin
ジン

とても元気で明るい少年。

ラオスの兵士で、ユーリスとの国境を監視する城の副官をしている。ある事件を切っ掛けにヒカりに命を救われヒカリと行動を共にすることに・・・。



Rou Taiga
狼 大河

狼家の当主で、面倒見のいいお兄さんの存在、月下を主としたいつも影ながら見守っている。武に長けていていて国の警護を任されている。

交差する思いの果てに・・・。

琢磨は、ヒカリ達と別れた後、真っ直ぐ城に戻ると王のもとではなく真っ先に女官達が寝泊りしている部屋に向かう。

女官達の部屋は位によって分けられていて、上位の女官は個室を与えられ位の低い女官達は広い一室を皆で共有し暮らしている。

一部の者を除いて女官達の部屋に男性が入ることは許されない。

琢磨は、例外の一人だった。

琢磨は、ある女性の個室の前で足を止める。

トントンと木の戸を叩く音がする。

「ハイ」

と弱々しい可愛らしい声が戸の向こうから聞こえてくる。

返事を聞き琢磨は部屋に入る。

「琢磨です入ります、姉上お加減はいかがですか？」

部屋の中には明かりはなく、窓から差し込む月光だけが部屋の主を照している。

薄暗い部屋の端にあるベッドの上には、不安げな顔をし肩を落としたリンの姿があった。

ヒカリの教育係をしていたころの明るく元気なリンの面影は無い。

リンのそんな様子を見て琢磨は繭を顰める。

リンはゆっくりと静かに口を開く。

「悪くわないは・・・

私のことはいい、それよりヒカリ様は！」

「大丈夫です今は浪家にいらっしゃいます。」

リンの顔に安堵の色がみえるが、すぐに顔色は変わりまた同じい色に戻ってしまう。

「琢磨、私はどうしたらいいのでしょうか！？」

すがるように琢磨に問いかけるリンの姿に琢磨は戸惑うことなく凜とした態度で

「姉上、今は体を休めて下さい王もそれを望んでいます。
きっと兄上も今の貴方を見たら悲しむはずです。」

兄上と言う言葉にリンが反応する。

「あの人のことは言わないで今は関係ないは！！
早くヒカリ様を城にお連れしなければ！
貴方も知っているでしょう、狼家には黒龍が・・・
あの二人は交じ合うことは許されぬ運命、世界の破滅を意味するのですよ」

「姉上まだそうと決まったわけでは・・・」

取り乱し焦るリンは、声を荒げる。

「何を暢気な！！早くヒカリ様を御迎えに行かなくては！！」

「ですが、狼家に残ることを決めたのはヒカリ殿自身です。
これも、神の意思なのでは」

「そうかも知れない、でも私は諦めることは出来ません。
この世界を滅ぼすことは許されないのです。あの人が愛した世界なのだから」

とリンは視線を落とし自分の両足がある方を見た。
動かない体を呪う、もしこの体が自由に動けば飛んで行けるのに
自分の意思に逆らいリンの両足はピクリともしない。
自由のきかない体が憎い・・・。

「何故動かない！！こんな大事な時に私は役立たずです。
私は貴方が羨ましい・・・」

そんな、リンの姿を見た琢磨は、

「では、姉上の代わりに私が参りましょう。」

と言うと琢磨は部屋を出て行こうとする。

「待ちなさい琢磨！」

思わずリンはベッドから立ち上がろうとするが足に力が入らず少し体を傾けるだけで精一杯だった。

バタンと戸が閉まる音がする。

「琢磨・・・。」

リンは自由に動くことのできない体を呪い実感するもう自分は見ていることしか出来ないのだこの世界の行く末を・・・

外は日がくれ夕日が空を赤く染め夜の訪れを知らせている。

ガタンと扉が開く

部屋に入ると心配そうな顔をした少女に大河は問いかける。

「どうだ月下の様子は？」

「分からない、ずっと眠ったままなの」

と言うヒカリの視線は床を見ていた。

狼家の他の部屋と比べ飾りつけがない部屋には、小さな窓以外には中央に月下が寝ているベッドがありその下には古びた模様が描かれていた。

広いだけが取り柄のような部屋だった。

「これで城で見た魔法陣よね？なぜここにこれが」

大河も視線を落とし魔方阵を見た。

「夜になると闇が濃くなり黒龍の力が強くなる、月下が寝ている間に黒龍が暴れないようにするためだ。

今は、月下の力が強く魔方阵無しでも大丈夫だが油断は出来ないからな、体が疲労していると黒龍の力を抑えられなくなる」

「じゃ、今は？」

大河は月下の左腕を眺めながら

「大丈夫だ刻印が出ていない」

「刻印！？」

「ああ、黒龍の力が強くなると浮かび上がってくる」

「じゃ、今までにも刻印が浮かんできたことがあるのね・・・」

ヒカリは眠る月下を眺めながら

「月下はいつも無理してる」

月下の体のあちこちに古い傷跡がある。

黒龍の力で人より治癒力があるとはいえ多い月下の今までの死闘の日々を思わせる。

「そうだな・・・

だが、月下には俺たちやヒカリがいる今までの月下とは違う、俺達が絶対一人にはしないさ」

といつもと違う少し重い口調で言った言葉が心細いヒカリの心に響く

思わず言葉が漏れる。

「ありがとう」

どうしてこん言葉がでたのかヒカリ自身も不思議だった。

「そんな不安げな顔するなよ」

と大河がヒカリの頭をポンポンと叩く。

「うん」

「綾女が夕食が出来たと言ってたから後で居間に来いよヒカリ

俺はお前も心配だ」

と言うと優しい大きい手が離れて行く。

「ハァ」

と自然とため息が出てそのままベッドに顔を押し付ける。

皆の優しさが痛い

ヒカリが城から逃げたことを責める者は狼家にはいなかった。

狼家は、月下を守護している家だ主人を2度もこんな姿にしたのに誰も何も言わないのだ。ヒカリが光の者だから特別扱いなのだろう。

皆、光の者であるヒカリを必要としている私じゃなく光の者を・・・。

光の者である自分を受け入れこの世界のために頑張ると決めた。でも、これから何人の人がヒカリをヒカリとして見てくれるだろうか？

『孤独。』

ヒカリの一番怖いもの。

でも、月下はそんな孤独と何年も戦ってきたのだ、体に見えるキズはほんの一部だ本当の傷は内にある。

そう思うとより一層月下を近く感じる事が出来た、それが悲しい感情だったとしてもヒカリは思わずにはいられなかった。

『不安。』

それを柔らげるために・・・。

『この世界に来ているんなことがあった。

有りすぎて忘れていたけど元の世界では私がいなくなってどうなっているんだろう？父さんは私のこと心配してくれてるんだろうか？それとも、何日も家に帰ってこない娘に呆れは家族三人で不良娘のことは忘れ楽しく暮らしているかもしれない・・・。

帰りたいのか？

と聞かれたら答えに困る、何故だろう？』

日が落ち辺りが暗くなる、久しぶりの穏やかな夜だった。

温かい優しい温もり

久しく感じたことが無い感覚だった。

とても心地よくて安心する

そうこれは、母上の温もりだ。

目を開けるといつも優しい眼差しで自分を見ていた、美しい黒い瞳に黒い艶やかな長い髪がとても似合っていた。

自分に微笑み掛ける母が好きだった、泣いている顔を見た記憶がない明るく笑顔が絶えない人だったと記憶している。

父は母に輪をかけたような優しい人で薬師を仕事にし、草花や昆虫が好きでよく自分に話をしてくれた。

親子3人町外れに建つ小さな家で暮らし、とても裕福とは言えなかったが幸せだった。

そうあの日までは・・・

ある日父と薬草を取りに出掛け家に帰るといつも優しい笑顔で迎えてくれていた母の姿がなかった。

代わりに家の戸の前に堅い顔をした体格の良い中年の男が立っていた。

城からの使者であると言う男は、父を馬車に載せ行ってしまう。

残された自分と母・・・

母は、何も言わず父が乗った馬車を見送る。

あっという間の出来事だった。

母は次の日になっても変わらずいつも通りに朝食の準備をする、いつもと変わらない朝父が居ないことだけが大きく違っていた。

父が居なくなり1ヶ月近くたったある日。

また、城からの使者が来て今度は自分と母を迎えに来たのだと言う。

母に連れられるまま馬車に乗り町を通り抜け大きな門がある城に着いた。

門の前には、白い上等な着物を着た父の姿があった。

その姿を見た母は父にしがみつき泣き崩れる。

その時は、何故母が泣くのか分からなかった。

数少ない幼い日の記憶・・・。

夢を見ていた、幼い頃の幸福だった数少ない記憶。

体が棒のようで動かず、動かそうとすると体のあちこちが痛いたくいつもより疲労の回復が遅く感じる。

大きな傷は深くそれも原因だったが何より病み上がりにならぬに力を使ったのが一番の原因だった。きしむ体を庇いながら上半身を起こすといつものベッドしかない殺風景な自分の部屋が目に入ってきた。

ガラんとした広い部屋は薄暗いせいもあり一層寂しいそうに見えた。

ちゃんと上に布団をかぶって寝ていたのに体が冷たく凍えている体の回復に力を使っているせいだけじゃない、日に日に黒龍の力が強くなってきているのを感じる。自分の体が黒龍を抑え込むのに必死で他の機能を後回しにしているせいだ。寝ている時よりも起きている時のほうが強く感じることもあった。

何気なく左腕を見る、刻印は浮かび上がっていない刻印が出てくると言うことは、黒龍の力を抑え込もうとしている証。浮かび上がってこないということはどういうことか？！

自分にもう時間がないことを示しているのか知れない。

ふと冷えきった体の一部に暖かい人の温もりを感じ目をやると、スースーと気持ちよさそうにヒカリが寝息を立てていた。月明かりに照らされて、そこだけが別世界のように感じられる

違う世界がそこにある。

何だか不思議な気がした大河以外に自分の部屋に入ってくる者がいるなんて、ライラや綾女ですら寝室には入ってこない黒龍を抑え込むこの魔方陣は普通の者には力が強すぎて部屋に入るのでさえ体に負荷がかかり辛い状態になる。この女は矢張この世界にとって特別な存在なのだろうどんな場所も彼女を受け入れる。

『不思議な女だ・・・。』

そう昔から自分に無い物を彼女は持っている、妬ましく思ったこともあったが愛しいと思うほうがいつも優っていた。

だからこそ巻き込みたくなかった。

だが、歯車は回りだし彼女をこの世界に召喚した、もしかしたら自分のせいで彼女はこの世界にくることになったのかもしれないいつも胸には罪悪感が付きまとい彼女のことをまともに見ることが出来なかった。

少し手をのばせば触れる距離に彼女がいる、少しぐらいなら夢を見てもいいのかもしれないと思わせる。

夢のような現実

月下が左手をヒカりに伸ばそうとした時だった激痛と共に体全体に刻印が浮かび上がる。

「うぁ」

悲鳴は声にならず激痛のせいで息をするのがやっとの状態だ両手で体を抱え込み痛みを耐える。

『欲しい』

「何を？」

どこからともなく低い隠った声が聞こえてくる、そう何度か聞いたことがある暗い闇へ自分誘う同居人の声だった。

『決まっているだろう』

「そんなに俺の体が欲しいのか」

『お前の体など借宿に過ぎない私は、この眩しい光が欲しい』

月下の意志と関係なく左手がヒカリの方に伸びる。

「ふざけるな！！」

月下は右手で左手腕を抑え込む。

『何故拒む、お前も欲しく堪らない癖に闇は光に惹かれ、光は闇に惹かれるそれは何故か考えたことがあるか？』

「煩い！ヒカリに手出しはさせない！！」

『だが、時間の問題だもうすぐ私は自由になるおわずけも悪くない、自由になった時の楽しみが増えるからなまだ少し眠るとしよう』

体から刻印が引いて行く月下は体から緊張が解けそのまま後ろに力なく倒れ込んだ。

「ハアハア」

と息が切れる痛みに耐えるため歯を食い縛り手のひらに力が入る。

矢張、自分は夢を見ることが難しいらしい近づいたと思った瞬間幸せが逃げて行く。

『不幸か？』

と問われれば、違うと答える自信はある。

だが、

『幸せか？』

と問われるとどうだろうか？

自由に動かせない体に、触れたいものに触れられないもどかしさ・・・。
もたもたしているうちに皆壊れていく。

だが、まだ守りたいものがあるこれだけは誰であっても壊させるものか神であっても絶
対に・・・。

カタン

と言う音でヒカリは目を覚ました。

目を開けると月下の姿はなく空のベッドがあるだけだった。

「あの体でどこに行ったの！？連れ戻さないと！」

ヒカリは部屋を出ていく。

ヒカリを呼びに来た綾女がその姿を見て・・・。

「ヒカリ！どこ行くのご飯どうするの！！」

ヒカリは気づかず行ってしまう。

「も～！！」

と怒りの声を漏らす。

「どうしたんだ綾女姉？」

ジンがいつものごとく、どこからともなく姿を現した。

「どうしたもこうしたもないわよ！

せっかく腕によりをかけて作った料理が冷めちゃうじゃない！」

「それは一大事だ！」

ジンが真剣な顔で言った。ジンはあの事件以来狼家に居候し、すでに馴染んでいた。

「オレも、ヒカリを探してたんだ呼んで来てやるよ」

「そう言えばジン、朝から見なかったわねどこに行ってたの？」

「ちょっとね」

と言うとヒカリを追って行ってしまう。

「ちょっとジン！皆して私を仲間外れにするんだから、お腹が空きすぎて死にそうになっても知らないから！！」

裏庭にある応接間で大河は、客人にお茶を出していた。

おぼつかない手つきで大河がお茶を入れる、茶葉にお湯を注ぐと良い茶葉らしく香ばしいよい匂いが辺りに広がった。

ごつい男が小さな茶器で、オッカナビックリお茶を入れるのを客人は興味深げに見ていた。お茶を湯飲みに注ぎ終えるころには堪え切れずに

「クスクス・・・」

と笑い声が漏れる。

「何が可笑しい！」

「だって、貴方がお茶を入れるなんて今まで想像したことなかったから貴方が入れると茶器がオモチャみたいなんですもの・・・クスクス」

口元を隠しつつも、笑わずにはいれないといった感じだった。大河は、頭をかきながら少し照れくさそうに客人にお茶を出す。

「でなんの用事なんだ、こんな時間にうちに来るんだ急な用事なんだろ？」

恋華は笑いすぎ濡れた目元を拭いながら

「あら幼馴染みに会うのに、何か用がなかったら来ちゃいけないの？」

といたずっぽく言う。

「お前なあ、仮にも国の司祭がこんな夜更けに護衛も連れず出歩く理由はあるだろう。」

と言い大河は思いもよらない急な珍客に乱された心を落ち着けようとお茶をすする。

「あら堅いこと言うのね。ゴクンあら、以外に美味しいじゃない。」

と恋華が素直にお茶を誉める。

「そうだろう！茶葉には拘りがあるからなあ！！」

と大河は満足そうに笑みを浮かべた。

「やっぱり、変わらないわね・・・ホットする貴方をを見ていると。」

「そうか？」

「そうよ私の周りは皆変わったわ、今まで親しくしていた人達が私を見ると頭を下げ足早に行ってしまう。

私は、私なのに・・・」

恋華はうつ向き湯飲みのお茶を眺める。

「恋華・・・。

皆が変わったんじゃないお前が変わったんだ、それを選んだのもお前だろ？」

視線を大河に向ける事なく

「そうね、選んだのは私・・・

そして、貴方を変えたのも私なのね。」

と重たい空気が室内に流れる、その空気を断ち切るように。

「何言ってるんだ偉そうに俺は俺の意志で選らんだんだ、お前が城に上がると決めたことに従うと決めたのは俺だ！！誰であっても他人の人生を選ぶことは出来ない、最後に選ぶのは自分だお前が気に病むことなんて無いんだよ！！」

「でも！」

と恋華が言うが大河は続ける。

「他人が変わろうが自分を持っていればまた人は戻ってくる、今の自分を必要としてくれるやつを大事にすればいい、俺は変わったつもりはなかったがお前が言うのならそうかもしれない、だがお前を助けたいと言う気持は今も変わらないつもりだそう思わせるのはお前だからだよ・・・」

と自然と真剣な顔付きになり恋華を真っ直ぐ観る。

どんなに時間がたって変わらない、俺だけは君を観ていると・・・。

『本当に変わらない真っ直ぐで眩しい人、こう言うことを恥ずかしがらず直球で言えるなんて・
・

だから、大河私は貴方を選らばなかったことをいつも心のどこかで後悔してしまう。自分の選らんだ人生に後悔しているわけじゃないの、でも貴方が私の隣にいないことだけが悔やまれる。こうして貴方に会いに来たのも私を繋ぎ止める言葉を聞き心確かめたかったからかもしれない。私は欲張りなのだろう顔を上げられない上げたら貴方を諦められなくなりそうだから、今日は貴方を諦めるために来たのに・・・』

声がでなかった、嬉しすぎて涙が溢れそうだ。

司祭になると決めた時、強く生きると決めたのに・・・

大河には叶わないきっと一生勝てる気がしない私の愛しい人。

「おい大丈夫か恋華？泣いているのか？
辛いなら司祭なんてやめたらいいんだ！！お前には俺がいるだろ！
うっいや、辞めろというのは本心じゃないぞ、いやでも辛いなら！
うわぁ！俺なにいつてるんだ！！ゴクゴクゴクあち！！」

大河は、恥ずかしさと焦るあまりお茶を一気呑みする、顔は火が付いたように真っ赤になっていた。

こんなこと言うはずじゃなかったのに、いつも強気な彼女の弱い姿を見てしまい思わず言葉に出してしまう。
頭と心は別物らしい・・・。

「クスクス、もう大河ったら」

大河は頭をかき恥ずかしそうに視線をそらす。

「大丈夫よ、ちょっと大河の顔を見たら安心して気が抜けたみたい」

と恋華は、笑顔を見せた。

「明日、正式に司祭の任に着くのそうなる外に出る事が出来なくなるから王にお願いして1日だけ自由に出歩けるようにして頂いたのよ。」

「そうか、実家には帰ったのか？」

「ええ、とても喜んでいたは特に父はね。今日は、貴方にお別れを言いに来たのあの時は言えなかったから」

恋華の家は、術にたけた名家で代々巫女を国に献上することで家の地位を保っていた。
恋華は家のため巫女となり城に上がったのだ。

「自分勝手なやつだなあお前は・・・
久々に現れたと思ったら司祭だと言うし、今度は急に来て自分の用事だけ済ませたらさっさとサヨウナラなわけ！？俺の気持も考えずに！恋華いや、キリコ様の方がいいのか？」

「怒っているの大河？」

「さあな、自分で考えろよ！！俺はそんなに寛容じゃない・・・
さっさと帰れ、俺はお前を諦めるきはさらさないよサヨナラなんか言わせるものか！」

と大河は駄々を捏ねる子供のようにだった。

恋華だから見せる姿、君だから・・・

「大河・・・本当にバカで恥ずかしい人ね」

と恋華は顔を赤らめ笑顔を作りながらも瞳から涙を流す。

「頑張ってきて恋華、お前がいいと言うまで俺は待っている。俺は筋金入りの頑固で恥ずかしいバカだからな」

と大河は泣いている恋華に優しく言葉をかけた。

触れることはしない放したくなくなるから、引き合っていても一緒になることの難しさ
周囲は二人の仲を許さなくとも、

惹かれ会う運命・・・

二人とも黙り静かな時間が流れる。

バタバタと空気を読まない足音が近づいてくる。

「何だ？そうぞうしい」

立ち上がり大河が戸を開け外を覗くと、ヒカリが廊下を走り大河達のいる部屋の方に走ってくる。

「おいヒカリどうした？」

「大河！！月下がいなくなっちゃって探しているのあんな傷だらけの体で出歩くなんて」

「月下が居ない！？」

大河は、何か思いついたように空を見上げる空には満月が・・・。

「明るいと思ったら今日は満月だったか、月下は裏庭だな月光浴でもしてるんだらう月の光は黒龍の力を抑える力があるからな、行ってみるといい」

「ありがとう、行ってみるわ」

大河の隣に恋華の姿が現れヒカリに頭を垂れる。

「ヒカリ様ご無沙汰しております。」

ヒカリは少し驚いて。

「恋華さん！？なぜここに？」

恋華は顔を上げると

「王からの伝言を、ヒカリ様が無事で良かったと一度城に戻って頂きたいとのことで御座います。」

とまた頭を垂れる。

「分かりましたとお伝え下さい、ごめんなさい私行かなくちゃ」

何故こんな時間に恋華と大河が一緒にいたのか少し気になったが、ヒカリは足早に裏庭の方に駆けていった。

ヒカリの後ろ姿を見送りながら恋華は浮かない顔をする。

「あの二人はどうなるのでしょうかね、貴方はどうするつもりなの大河？」

「どうもしないさ、2人の人生だ俺は見守るだけだ」

「でも、幼い心では危険だはこの世界を亡ぼしかねない分かっているの？
光と闇は惹かれ合うけど交わることは決してないわ」

「滅んだら滅んだ時さ、俺はあの二人のことかが好きだあいつらが望む世界ならどうなっても悪くない」

恋華は大河の手を取り祈るように空を見上げる。

後、何度この空を見上げることが出来るのだろうか・・・

戦争が長期に渡り行われ国はみるみる衰退していく、人の心は病みそこえ闇みが忍び込む
そして、世界は闇に包まれ姿を消すのだ。

愚かな人の手によって・・・

「そうね、私も見てみたいどんな結末になったとしても」

二人が見上げる空、いつまでもこのままでと恋華は願うのだった。

裏庭は、あまり手入れが行き届いていないようで草がおい繁っていて草をかき分けヒカリは進む。

すると、月光に照らされキラキラと光る水面が見えてきた。

狼家の裏庭は、少し離れたところに湖があった、獣が時々でるせいで余り人が寄り付かないらしい。

湖の畔に人影が見える。

『月下だ！』

視線は遠く湖を見ている。

風が月下の髪を揺らし月光を浴びる月下の姿は、とても神秘的に見えた。

『こうやって観ると、整った顔をしてるのよね・・・』

あの性格の悪さがなければ文句なしで王子様なのにずっと見ていたい・・・
てっ、何で私あんな奴に見とれてるの！？』

とヒカリは自分の頬を摘まむ。

ドキドキ

ヒカリの胸から音がする。

自分でも分からないこのドキドキがなんなのか、知りたいようで知るのが怖い気もする。

『こ、声を掛けなくちゃお礼を言うんでしょ、助けてくれてありがとうって』

「月下！」

ヒカリは勢いに任せて声を掛ける。

月下は声がかかる方に振り向くとヒカリの方を見るやいなや、なぜか嫌な顔をする。

『何で、そんな顔するのよ・・・』

「お前こんな所で何をしてる！一人なのか！？」

と少し強い口調で怪訝そうな顔をする。

『何で、いつも私の顔を見ると嫌な顔をするの？飛行機で見せた笑顔は幻！？』

「一人だけど、月下が心配で・・・それにお礼が言いたくて・・・」

と少し遠慮がちにヒカリが言うが月下には届かない。

「早く屋敷に戻れ！お前は考えがなさすぎる、一人で出歩くななんてさらってくれと言っているようなことだと分からないのか？それにここは、狼家の裏庭だが獣が出る一人でフラフラ来るところじゃない！！」

月下はその場に立ったままでヒカリに近づいてこようとはしない、ヒカリはそんな月下を見てこっちに来るなど言われているような気がした。

『頭にきた！なにこの上からの物言いは！心配して来てやったんじゃないの何よ少し変わった気がしたのに・・・』

そう思ったのは私だけだったみたい』

「もういい月下なんて知らない！！傷口が開いて倒れても知らないから！！」

ヒカリは屋敷の方に走って行く。

「おい待て、ヒカリ！」

と月下が呼び止めるが行ってしまう。

月下はとっさに追いかけてやうとする仕草をするが、黒龍の言葉が頭を掠める足を止め。

「これでいい、自分に近づけば傷つけてしまうのは分かっている。
それに一度触れてしまえば手放せなくなる。夢を見てはいけない・・・」

月下はその場に立ち尽くし、ヒカリが消えて行った方を寂しいそうに見つめていた。

「なんなのあの月下の態度！！頭にくるったら！！」

とヒカリは怒りに任せて、ずかずかと草を踏みつけ早足で歩く。

「人がせっかく心配して・・・。」

『また、逃げてしまった自己嫌悪・・・はあ、私の悪い癖だ。』

さっきの勢いはなくトボトボ歩く。

『人と向き合うのが私は苦手らしい・・・
聞けば良かったのかなあ、いやいや聞けないよ無理無理！！あんな威圧されちゃ・・・』

「月下が悪い！そうよ、月下が悪いのよきっと・・・」

足が自然と止まる。

「悲しい、悲しいよ月下！でも、泣いてなんてやるもんか！」

静かな夜に宴の終わりを告げるような途切れ途切れに聞こえる虫の音が、よりいっそう悲しい気持にさせる。

『上を見なきゃまたもとどうりだでなきゃ私・・・ここにいられない』

足元は暗く月の光りも草が生えた地面までは届かない、どこまでも続く闇みに飲み込まれてしまいそうでヒカリは怖くなった。

『孤独』

どこにいても付きまとう恐怖、そう誰もが持っている闇み・・・。

やっと抜け出したと思ったのに・・・。

気を抜くとすぐに元通りだ、弱い自分が嫌になる。

月下は特別で怖くないのかもしれない、いつも一人で涼しい顔をしているし今もヒカリを追ってきてくれない。

やはり顔を上げるのは至難の技らしい、このまま木にぶつかる覚悟で歩き出そうとした時だった

。

コツンと額に衝撃が走る。

「何してるんだヒカリ?! 何度も呼んだんだぞ」

声ができる方を見上げると、心配そうな顔をしたジンがヒカリを見下ろしている。

「ジン! 帰ってたの!？」

コツコツと優しくジンがヒカリの額を叩く。

「また考え事か? ヒカリは考えすぎじゃないかすぐ婆さんになっちゃうぞ」

とヒカリの額をコツコツまた叩く。

『あつまた背が伸びた!!』

最近ジンは遅い成長期らしく一晩で身長がビククルするほど伸びる、自分でも急な体の変化に対応しかねるようで柱や看板などによく頭をぶつけるしまつた。

「お婆ちゃんは言い過ぎよ! もー」

と心配かけないように少し怒ってみせる。

「ははは、やっぱヒカリは元気に拳振り上げてるほうがいい」

とジンはからから笑う。

『ジンはどうしてこうタイミングよく現れるんだろ!? 城の時といい今といい私が寂しいと決まって現れる。』

それに月下と違い優しいし、以前の小さいジンも可愛かったけど今は背が伸び遅しい体つきが男らしく感じるってなに考えてるの私・・・』

と少し顔が赤くなるのが分かる。

「ジン、朝からいなかったけどどこにいったの?」

ジンがヒカリから目をそらすのが分かった。
ヒカリは慌てて。

「いや、言いたくなければいいのよごめんね」

とヒカリは肩を落とす、少しの沈黙の後ジンは

「ヒカリなら構わない」

とポツリと言った。

「えっ！それはどうゆう？」

ヒカリはジンの言葉に聞き返す

ジンはとても真剣な顔をしヒカリを観ている。

『何？この感じ・・・ジンがこんな顔をするなんて』

「だから、ヒカリならいいと言ってるんだ！何回も言わすなよ」

ヒカリは言われていることが分からず

『どういう意味！！』

と心で呟く。

ヒカリにはこういった経験値が低く対応に困り固まりジンを凝視する。

「おい！そんなに見るなよ」

とジンは少し顔を赤くしながら視線を反らす。

『なっなにこの感じ！？何だか私も恥ずかしくなってくる』

ヒカリは頬を赤くし自然とうつ向く、二人とも黙り込んでしまう。
ジンは耐え兼ね口を開く。

「ヒカリはツバメを知ってるだろ例の事件の時会っているはずだ」

「ツバメさん！？」

ツバメとは、ヒカリが拐われた時に一緒に馬車に乗っていた威勢の良いヒカリと同じ歳ぐらいの女性だった。

『ツバメさんに何でジンは会いに行くの？』

ジンは複雑な顔をして、

「オレ達は幻影の遊牧民族と言われているツバメは妹の世話係だったんだ。
幻影の民は、聖域を守るために存在しているそのため聖域が何処にあるのか他の民族に知られないために各地を移動しているんだ、本当の集落は聖域を守るため動くことはない、集落がどこにあるのかは幻影の民のみが知っている」

『そういえば、夢で見たジンの故郷は古く歴史がある赤い柱が印象的な建物が立っていたっけ』

ヒカリは以前ジンを闇に囚われ瀕死の状態だった時にジンの心の記憶で見た景色を思い出していた。

『何だか懐かしい感じがして、のどかで綺麗なところだった。』

そして、そこで見た幼いジンにムイは使えているように見えた。ラオスの城ではジンの方がムイの部下だったのに』

「じゃ、ジンも幻影の民なのねもしかしくなくてもムイさんも・・・」

ムイの名を聞きジンの顔が少し曇る。

「ああ、ムイはオレの世話係だったんだ城ではオレを守る為にあえて隊長をしていた。オレは、幻影の民の長の長男に生まれたんだ聖域を守るために一生集落から出ることは無いと思っていた。幻影の民の口は堅い今まで里の情報が外部に漏れることはなかったが、5年前の冬の出来事だったどこで集落の場所を知ったのかラオス軍が攻めて来たんだ。戦う術を知らない幻影の民はあっという間に集落を占領されてしまった、オレや妹も捉えられ捕虜になった老人や女・子供は人質に取られ他の者は兵士に逆らえば人質を殺すと脅された。」

ジンの表情はとても険しく思い出すのも辛そうだった。

「だが、この間の宴の騒動で幻影の民の男達は皆命を落とし人質は必要無くなってしまった。必要最低の者を残し後は皆殺されたそうだ、ツバメは命からがら逃げて来たらしいオレのせいだオレがあんなことしたばかりにムイは闇を呼んだオレを守るために・・・」

自分が犯した罪の重さにジンは手が震える。

「ジン大丈夫!？」

ヒカリは震えるジンの手を取った、手の振動がヒカリの体に伝わってくる。辛すぎるいつからジンは独りでこんな辛い現実を抱えていたんだろうか!?自分なら到底平常心ではいられない。

「もういいよ話さなくて、ジンが壊れてしまいそうで私・・・」

ヒカリはジンを見上げる、ジンは真っ直ぐ静にヒカリを覗いている悲しい瞳の色をして・・・。

「城跡を見て来たよ何も残っていなかった闇が食いつくしたんだ、影すらのこっちゃいない償いはするだがムイがオレを守るためにしたことは幻影の民にとってそれが最善であると判断したからだ、幻影の民は何より聖域を守ることを優先するオレが生きることが聖域を守ることだとムイは言っているんだ。オレが出来ることきっとある、生きるよ俺を生かしてくれた民のためにも・・・。」

ジンの瞳に今度は揺るぎない決意がみえる。

もうきっと迷うことはない真っ直ぐ先を見ているヒカリはジンが羨ましく思えた強い心それこそ、未来を切り開く力!!

「一度集落に帰ってみようと思っているんだ現状を見にそして、妹を助けたい黙って行こうかとも思ったんだがヒカリには伝えるべきだと思って・・・」

ジンの視線がヒカリに注がれる、ヒカリは少し頬が赤くなるのを感じたジンの視線が余りにも真っ直ぐヒカリをみるから・・・。

「ジン、帰ってくるよね!？」

ヒカリは、急に不安になる、何だか嫌な予感がする。

この世界は色んなことが起こり過ぎている、何かが足りないそんな気がする。そのせいでバランスが崩れそこからパラパラと少しずつ崩れ落ちていく、この世界自体が砂時計のようだ。世界の

様子がこの世界の残りの時間を表している、何が足りないのか今のヒカリには分からないそのことがよりいっそうヒカリを不安にさせる。

「ヒカリ オレ、本当なら離れたくないヒカリが観えなくなると不安だお前がまた無茶するんじゃないかって」

ジンの顔がさっきよりより一層赤くなる。

「大丈夫よジン心配しないで、私も少しは成長してるのよ」

「そかオレにはそうは思えない、ここだって獣がでるんだ一人で来るところじゃないだろあいつがいるからなのか……。」

とられたくない誰にも、離れている間に君が誰かのものにならないように君の心を繋ぎとめておきたい。

君がオレを見ていないとしても……少しでも可能性があるのなら自制がきかない……。

黙り込んでしまったジンを心配してヒカリは歩み寄り顔を覗き込む。

『君がほしい……。』

ジンの腕はヒカリを抱き寄せる。

「ジン!？」

急な出来事にヒカリは戸惑う。

「好きだヒカリ、誰にも渡したくない」

力強い腕がヒカリを離さない、ドクドクとジンの鼓動が伝わってくるヒカリの思考は突然の出来事にフリーズしてしまう。

遠くの方で、獣の遠吠えが聞こえる。

月下は、まだヒカリが消えていった方を眺めていた。

『これでいい……。』

と自分に言い聞かせる自分がそばにいると彼女を危険な目に合わせてしまうに違いない、今にでも走って行ってしまいそうな気持ちを抑え込む。そこに、飢えた獣の遠吠えが聞こえてくる。

「ヒカリ！！」

押さえることが出来なかった、獣の声などきっかけでしかない簡単に枷は外れてしまう。それが、悲惨な結末であったとしても求めてしまう君を……。

月下はヒカリの姿を探し走り出す、木の陰の向こうにヒカリの姿を見つけ月下は足を止める。

「はあはあ、良かった無事かヒカリ……。」

月下がヒカりに歩み寄ろうとした時だった、抱き合う二人の姿が目に入る。

「ふっふふ、笑える。」

笑が込み上げてくる、不甲斐ない自分が可笑しくて堪られなかった。

自分から手放したとしても、最後には彼女を守るのは自分だと思っていた、ずっと思っていたかった……。

でも、違っていた。

彼女の周りにはたくさんの頼れる者がいる、自分がいなくとも困ることは無い。

彼女は闇を照らす光、闇には眩し過ぎる……。

『諦めるのか？』

また、同居人の声が聞こえてくる。

「諦める何を？お前は何か誤解している俺は最初から何も望んでなんかいない
そう失うものなど俺には無い初めから・・・」

『失うことが怖いだけだろ』

「そうだ失うものが無ければ傷つく事も無い、もう失いたくない父上や母上のように・・・。」

愛しい人がいなくなる悲しみや恐怖は孤独より月下を苦しめる。

ヒカリは、まだジンの腕の中にいた。

「ジン、私・・・。」

ヒカリの言葉を遮ってジンは

「絶対帰ってくるからその時に答えを聞かせて欲しい、行こうヒカリ綾女姉がカンカンだぞ！！
」

とジンはヒカリの顔をまともに見ることはせずヒカリの手を引いて屋敷に向かっていく。

「ジン絶対帰ってきてね」

ジンの背に向かってヒカリは言う。

「ああ」

とジンは答えた。

ふとヒカリは、後ろを振り返る・・・。

そこには、人影もなくただ木が風で揺れている。

『月下・・・・・・・・。』

何故だろう、ジンに抱かれている時も月下のことが頭から離れない。

ちゃんと屋敷に帰ったんだろうか心配になるが、ジンの手を振り払う事もできず屋敷に戻った。

静かな夜に獣の声が悲しく響く泣いているかのようだ。

『思いは交差するが届かない、交わっては離れていく人の思いは複雑で難しく愛おしい・・・・・・・・。
だから人間は面白い。』

と誰かが呟いた。

あとがき。

モカです◎

月のヒカリⅣを読んで頂きありがとうございます！！

今回は、大河が表紙です！！

個人的には月のヒカリの登場人物のなかで大河一番好きなので念願の表紙となりました。

もうちょっとワイルドで大人っぽくても良かったなあと思います。

悲しいことに今回で、書き溜めていたお話が終わってしまいました。

今度こそ少し時間が空きそうです・・・。

まだまだ、イラストリクエストお待ちしております！！

さあ、今度の表紙は誰にしようかな？

では、またお会いできる日を楽しみにしております。

コメント待ってます！！

モカ